①本時を構想する上でポイントとなる素地

○問題解決のための知識・技能

・わり算の意味について理解し，九九を使って余りのある割り算の計算ができる。

○既習とつなぐ見方・考え方

・絵や図やブロックを使い，まとまりをつくって考えればよいことを学習している。

○共同追究での新たな見方・考え方

・あまりを切り上げて処理する。

○新たな見方・考え方を支える学習

・わり切れないわり算の式をかくときは，商とあまりをかくことを学習している。

≪学習問題≫

20人の子どもが，長いすに

3人ずつすわっていきます。

みんなすわるには，長いすが

何きゃくいりますか。

教材研究ノート№3-A-7

≪定着・活用問題≫

授業計画･実施記録

主眼

≪学習問題≫



１　課題とまとめを一体のものとしてとらえるには

②学習課題：絵や図やブロックを使って，あまりの2人をどうすればよいか考え，説明しよう。

②見通し：余りのある割り算だけど，余りはきかれていない。

→ 余りの2人をどうすればよいかを考えよう。

③個人追究：「みんなすわるには」に着目し，あまりの2人の処理を考え，長いすの数の求め方を説明する。

④共同追究前半（解法の比較検討）

「みんなの考えの似ているところはどこだろう？」

→「あまりの2人も1つのかたまりと考えて，あまりの人の長いすの数も入れて，答えを求めている。」

」　　　　　　　　　　　　　」

→「　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　」

④共同追究後半（思考を深める）

「答えを求める式は，どのようにかけばよいのだろう？」

→「20÷3＝6　あまり2　で，あまった2人のすわる長いすの数としてもう1きゃく含めるから，6＋1＝7とかけばよい。」

⑤まとめ（子どもの言葉で）

・あまりも1つのかたまりと考えて，わり算の商と合わせれば答えが出る。

・絵や図やブロックを使って，まとまりをつくって考えていくと，

長いすが何きゃく必要かがわかった。

****

⑥定着･活用問題

ドッジボールが11こあります。

1回に2こずつはこぶと，何回でぜんぶ

はこべますか。

＜本時の展開に当たっての留意点＞

・課題把握の場面では，これまでのわり算の問題と何が違うのかをはっきりさせ，本時の考えるポイントである「あまりの2人をどうしたらよいか」を意識させる。

・共同追究の場面では，それぞれの考え方の似ているところ（共通点）に目を向けさせながら，「あまりを切り上げる考え方」の理解を深めていく。

【板書計画】